

『太平広記』 訳注

—— 卷四百二十「龍」三(上) ——

太平広記読書会

本稿は前稿「『太平広記』 訳注 —— 卷四百十九「龍」二(下)

——」(『国語国文学研究』第四十六号 二〇一一年)に続き、『太平広記』の卷四百二十前半四話の訳注である。『太平広記』は北宋の初めに編纂された小説を集めた類書である。本書は日本の説話文学に影響を与えたことでも知られており、その訳注を行うことは今後の中国文学・日本文学双方の研究に資するところが大きいと考える。

またこれは平成十七年七月十四日より始まった『太平広記』読書会の成果の一部でもある。当読書会は熊本大学所属の教員を中心に、他大学の教員や学生、社会人など、所属の枠にとらわれず広く集まった有志による会であり、今後も『太平広記』を読み進めていく予定である。

底本、参考文献、及び字体については「『太平広記』 訳注

—— 卷四百十八「龍」一(上) ——」(『国語国文学研究』第四十三号 二〇〇八年)に記した通りである。作品番号は前稿の続きとする。

○16 「俱名国」

〔本文〕

『僧祇律』云、佛住舍衛城南方、有邑名大林。時有商人驅八牛到北方俱名國、有一商人在澤中牧牛。時有離車捕龍食之、捕得一龍。離車穿鼻牽行。商人問離車、「今汝牽此龍何用。」云、「我將殺而爲噉。」商人欲以一牛易之。捕者邀至八牛、方許。商人即放龍令去。既而復慮離車追逐、復捕取放別池中。

龍忽變爲人、謂商人曰、「君施我命、今欲報恩。可共入宮。當報大德。」商人答言、「龍性狂暴、曠恚無常。或能殺我。」答云、「不爾。前人繫我、我力能殺彼人。但以我受菩薩法、都無殺心。何況君今施我壽命、願當加害。若不去者、少住此中。我先往掃除。」

商人後入宮内、見龍繫在一處。因問、「汝爲何被繫。」答言、「此龍女半月中、三日受齋法。我兄弟守護此龍女、不爲堅固、爲離車所捕。以是被繫。」龍女俄出、呼商人入宮坐寶牀上。

龍女言、「龍中有食、能盡壽而消者。有二十年消者、有七年消者、有閻浮提人食者。未知君欲何食。」答言、「須欲閻浮提食。」即時種種飲食俱備。商人問龍女、「此龍何故被繫。」龍女言、「此有過、我欲殺之。」商人言、「汝莫殺。」乃言、「不爾。要當殺之。」商人言、「汝放彼者、我當食耳。」復言曰、「不得直放之。當罰六月、擯置人間。」

商人見龍宮中、寶物莊嚴飾宮殿。即問、「汝有如是莊嚴、因受菩薩何爲。」答言、「我龍法有五事苦。」何等爲五。」謂、「生時、眠時、姪時、嘔時、死時。一日之中、三過皮肉落地、熱沙簇身。」商言、「汝欲何求耶。」答言、「人道中生。爲畜生苦不知法。故欲就如來出家。」

龍女即與八餅金、言、「此金足汝父母眷屬終身用之不盡。」復言、「汝合眼。」即以神變持着本國。以八餅金與父母、曰、「此是龍金。」說、「已更生盡壽用之不可盡。」

時思念仁慈不得不行、暫救龍女、恩報彌重。況持大齋、受福寧小。(出『法苑珠林』)

〔訓読〕

『僧祇律』に云ふ、仏の住むところの舍衛城しゃゑじやうの南方に、邑有り名は大林。時に商人有り、八牛を驅りて北方の俱名国に到らんとするに、一商人有り、沢中に在りて牛を牧ふ。時に離車有り、竜を捕らへて之を食らはんとし、捕へて一竜を得。離車鼻を穿ちて牽き行く。商人離車に問ふ、「今汝此の竜を牽きて何にか用ふる」と。云ふ、「我將に殺して噉たぐを為さんとす」と。

商人一牛を以て之に易へんと欲す。捕ふる者邀まねめて八牛に至り、方めて許す。商人即ち竜を放ちて去らしむ。既にして復た離車の追逐せんことを慮り、復た捕へ取りて別の池中に放つ。竜忽ち變じて人と為り、商人に謂ひて曰く、「君我が命を施せば、今恩に報いんと欲す。共に宮に入るべし。当に大徳に報ゆべし」と。商人答へて言ふ、「竜は性率暴にして、常無し。或いは能く我を殺すか」と。答へて云ふ、「爾らず。前人我を繋ぐも、我が力能く彼の人を殺す。但だ我の菩薩の法を受くるを以て、都殺す心無し。何ぞ況んや君、今我が壽命を施せしに、顧かへつて害を加ふるに当たるか。若し去かずんば、少しく此の中に生まれ。我先づ往きて掃除せん」と。

商人後宮内に入り、竜門の辺を見るに、一竜繋がれて一処に在り。因りて問ふ、「汝為何れぞ繋がるるや」と。答へて言ふ、「此の竜女半月の中、三日齋法を受く。我が兄弟此の竜女を守護するも、堅固為らず、離車の捕ふる所と爲る。是を以て繋がる」と。竜女俄かに出で、商人を呼びて宮に入りて宝牀の上に坐せしむ。

竜女言ふ、「竜中に食有り、能く寿を尽くして消ゆる者なり。二十年にして消ゆる者有り、七年にして消ゆる者有り、閻浮提の人の食らふ者有り。未だ君の何れの食を欲するかを知らず」と。答へて言ふ、「須らく閻浮提の食を欲すべし」と。即時種種の飲食俱に備はる。商人竜女に問ふ、「此の竜何の故に繋がるるか」と。竜女言ふ、「此過有りて、我之を殺さんと欲

す」と。商人言ふ、「汝殺す莫かれ」と。乃ち言ふ、「爾せず。要ず当に之を殺すべし」と。商人言ふ、「汝彼の者を放たば、我当に食らふべきのみ」と。復た言ひて曰く、「直ちに之を放つを得ず。当に罰すること六月にして、人間に擯置すべし」と。

商人竜宮中を見るに、宝物莊嚴にして宮殿を飾る。即ち問ふ、「汝是の如き莊嚴なる有りて、因りて菩薩を受くるは何為れぞ」と。答へて言ふ、「我が竜の法に五事の苦有ればなり」と。「何等をか五と為す」と。謂ふ、「生時、眠時、姪時、嘔時、死時なり。一日の中、三過皮肉地に落ち、熱沙身に簇まる」と。商言ふ、「汝何を求めんと欲するか」と。答へて言ふ、「人道中の生なり。畜生と為りて苦しむは法を知らざればなり。故に如來に就きて出家せんと欲す」と。

竜女即ち八餅金を与へ、言ふ、「此の金汝が父母眷属の終身之用ふるも尽きざるに足る」と。復た言ふ、「汝眼を合せよ」と。即ち神変を以て本国に持着す。八餅金を以て父母に与へ、曰ふ、「此は是竜金なり」と。説く、「己更生して寿を尽くすまで之を用ふるも尽くすべからず」と。

時に仁慈を思念し行はざるを得ず、暫く竜女を救ひ、恩報弥いよ重し。況んや大齋を持するをや、福を受くること寧ぞ小ならん。

〔語注〕

○『僧祇律』書名。『摩訶僧祇律』（大正藏一四二五）のこと。東晋・仏馱跋陀羅訳。釈迦入滅後の根本分裂によって生じた一

派である大衆部の律藏（僧侶の生活規則や教団の運営規則を記した典籍）。この話は『摩訶僧祇律』卷二十二「明雜跋渠法」に載せられている。ただし、『摩訶僧祇律』では主人公の商人は竜女にもらった金を父母に渡した後に出家しており、この出来事が商人が仏道の力を知つて出家を志す契機として記されている。○舍衛城 シラーヴァステイー。梵語のŚrāvastīの漢訳。コーサラ国の中心地で、現在のマハーートの遺跡がその宮殿址に比定されている。隣接してサーヘート（祇園精舎）の遺跡がある。釈迦はかつてここに二十五年滞在して多くの民衆を教化したという。○大林 大林精舎のあつた場所か。大林精舎は天竺五精舎の一つで、中インドの毘舍離（ヴァイシャリー）国都城の附近に在つた大林中の精舎の名。釈迦が滞在中に説法を行つたという。齊・僧伽跋陀羅訳『善見律毘婆沙』卷十（大正藏一四六二）に「爾時佛住毘舍離大林中、於高閣講堂中。毘舍離者、此是國名也。……大林中於高閣講堂者、此林無人種自然而生、從迦維羅衛國連至雪山、故名大林。高閣講堂者、於大林作堂、堂形如雁子、一切具足、爲佛作此堂也。」（爾の時仏毘舍離の大林中、高閣講堂中に住まる。毘舍離は、此は是國の名なり。……大林中 高閣講堂に於いてとは、此の林人の種う

る無く自然にして生じ、迦維羅衛國より連りて雪山に至り、故に大林と名づく。高閣講堂は、大林に於いて堂を作るに、堂の形雁子の如く、一切具足し、仏の為に此の堂を作るなり。）とある。なお毘舍離は舍衛城の西南西に当たる。○俱名國 未

詳。出典の『法苑珠林』は「俱多國」に作るが、どちらも大正蔵では本話以外に用例が見られない。『法苑珠林』が出典とする『摩訶僧祇律』、また『僧祇律』から本話を引用する梁・宝唱等『経律異相』卷四十三「估客」部「商人驅牛以贖竜女得金奉親」(大正蔵二二二二)は「俱多國」に作っており、慧琳『一切経音義』卷七十九「音経律異相」(大正蔵二二二八)には「俱多國 多舸反。梵語西方國名也。」(俱多國 多舸の反。梵語の西方の国名なり。)とあるが、やはり本話以外に用例が見られない地名である。○離車 離車毘(梵語Uccāva)の略。前述の大林精舎のある毘舍離國の王族の名。慧琳『一切経音義』卷二十五「大般涅槃經音義」に「毘舍離 城名。在中印度。正云吠舍釐。周五十里、宮城周四五里。離車子、正云栗帖婆。王種也。」(毘舍離 城の名。中印度に在り。正に吠舍釐と云ふ。周五十里、宮城は周四五里。離車子は、正に栗帖婆と云ふ。王種なり。)とある。○菩薩 菩提薩多略。悟りを成就して如来となることを目指し修行中の人。「菩薩法」は、悟りを開かんとして行つ修行の法、「菩薩行」に同じか。菩薩行は「波羅蜜」とも言い、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜や、これにその助けとなる方便・願・力・智を加えた十波羅蜜などがある。○爲何 「何爲」に同じ。『史記』卷三十九「晋世家」に「楚得臣怒、擊晉師、晉師退。軍吏曰、爲何退。」(楚の得臣怒り、晋師を撃ち、晋師退く。軍吏曰く、「爲何れぞ退くか」と。)とある。『法苑珠林』『摩訶僧祇律』はともに「爲何事」

に作る。○龍女 仏教に於いて竜女と悟りの問題としては、『妙法蓮華経』卷五「提婆達多品」(大正蔵二二六二)の所謂「竜女成仏」の話が思い起こされるが、この話との直接的な関連性は未詳。○齋法 八斎戒(不殺生・不偷盜・不姪・不妄語・不飲酒・化粧や歌舞に接しない・高くゆつたりした床で寝ない・昼過ぎに食事しない)のこと。毎月八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日の六日間、在家の人々が身心を清浄に保ち、八斎戒を守つて善事を行うことを六齋という。ここで一月に六日と言わず、半月に三日という言い方をする意図は未詳だが、このことを言うか。○盡壽 死ぬまで。ここでは、食物が一定期間の後消化しきることをいうか。○閻浮提 梵語「Induvidya」の漢訳。琰浮洲・閻浮提鞞波・瞻部洲。意識して穢洲という。須弥山の南方にある大洲の名。吾人の住処をいう。人間界。インドの事ともいう。○要 かならず。○擯置 「擯」は捨てる。「擯罰」は仏教語で戒律を犯した者に加える刑罰なので、ここでは罰として人界に流す意。○五事苦 未詳。五種の苦しみの意か。仏教語の「五苦」は生苦・病苦・老苦・死苦・愛別離苦の五種。○一日之中く執沙簇身 「三熱」の一つを言うか。三熱は「三患」とも言い、竜の身にとつて逃れられない三種の苦しみ。熱風熱砂に身を焼かれる苦しみ、暴風のため衣服を奪われる苦しみ、金翅鳥に捕食される苦しみをいう。晋・法立等訳『大樓炭経』卷一「閻浮利品」(大正蔵二二三)などに詳しい。○過 くり回。回数を表す量詞。江藍生・曹広順『唐五

代語言詞典」（上海教育出版社一九九七年）に「遍、動量詞。」とある。○人道 本文では続いて「畜生」とあるので、六道の一つである人間道に同じか。六道とは衆生が業によって趣くところの世界、或いはそこでの生存状態。地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道をいう。○如來 既に修行を完成した人。仏のこと。○餅金 「餅」は餅のように丸くて薄く、平らかな物の称。○神變 仏・菩薩が衆生の教化のため、超人的な力によって種々の姿や動作をあらわすこと。○持着 義未詳。到着することをいうか。○思念く寧小 この部分は本来、『法苑珠林』では割り注になっているもので、『摩訶僧祇律』の本文ではないと思われる。○大齋 齋食を設け、僧を供養する大法会。○『法苑珠林』 唐の釈道世の撰。全体を百篇六百六十八部に分け、「述意」として趣旨を説明した上で、各種仏典から故事をテーマ別に集めた仏教類書。この話は巻九十一「受齋」篇「引証」部（大正蔵二二二二）から引用されているが、そこでは『僧祇律』を引用している。

〔訳文〕

『僧祇律』に次のような話がある。仏がお住まいであった舎衛城の南方に、大林という集落があった。ある時、商人が牛を八頭引き連れて北方の俱名国へ行こうとしており、その商人の一人が湿地に牛を放して草を食べさせていた。ちょうどその時、在地の王族の者が竜を食べようと一頭捕まえた。王族は竜の鼻に縄を通して引き連れていった。商人が王族に「今あなたはこ

の竜を引き連れていってどうするつもりなのでしょう。か。」と尋ねたところ、王族は「私はいつを殺して食べるつもりだ。」と答えた。商人は牛一頭と交換するように願ったが、竜を捕えた王族は牛八頭まで増やしたところで、やっと交換を許した。商人はすぐに竜を放して逃がした。しかし王族が後からまた捕まえるのではないかと心配になり、再び竜を捕らえて別の池に離してやった。

すると竜は突然人の姿に変化し、商人に「あなた様は我が命をお救い下さいましたので、今御恩返しをいたしたく思います。どうか一緒に宮殿において下さい。きっとあなた様の偉大なる徳に報いましょう。」と言った。商人が「竜は性格が粗暴で、怒りが安定していません。私を殺すこともあるのではないかと尋ねると、竜は「そんなことはございません。先ほどの者は私を縛り付けましたが、私の力はあやつを殺すことではできたのです。しかし私は菩薩の法を授かっておりますので、殺そうという気持ちは全くありませんでした。ましてやあなたは我が命をお助け下さいましたのに、逆に危害を加えたりすることがあるでしょうか。もし何処へも行かれないでしたら、少々こちらでお待ち下さい。私は先に戻って片付けておきましょう。」と言った。

商人はその後宮殿に入り、竜宮の門の辺りを見てみると、竜が二頭一箇所に繋がれていた。そこで「そなたはどうして繋がれているのか。」と尋ねると、「こちらの竜女様は半月の内、三

日は齋法を受けて戒律を守っておられます。私も兄弟はこの竜女様をお守りしているのですが、守りが十分でなかったため王族の者に捕らえられてしまいました。そこで繋がれているのです。」と答えた。その時竜女が突然出てきて、商人を呼んで宮中に入り、寶石で飾った腰掛けに座らせた。

竜女は「竜には一定期間経ってから消え去る食べ物がございます。二十年で消化するもの、七年で消化するもの、人界の者の口にするものがございます。あなたはそれを御所望でしょうか。」と言った。商人は「人界の食べ物や食べ物をいただきます。」と答えた。すぐに様々な飲み物や食べ物がずらりとそろった。商人が竜女に「この竜は何故繋がれたのでしょうか。」と尋ねると、竜女は「こやつは過ちを犯しおったので、殺そうと思っております。」と言った。商人が「どうか殺したりなさいませぬ。」と言うと、竜女は何と「そうは参りませぬ。どうしても殺さねばなりません。」と言った。商人が「あなたが彼の者をお放し下されば、私も御馳走になることに致しましょう。」と言うと、竜女は「すぐに放すことはできません。人界に六ヶ月流謫せねばなりません。」と言った。

商人が竜宮の中を見るに、宝物が蔽かに宮殿を飾っていた。そこで商人が「あなたはどのようにご立派なものをお持ちですか、菩薩の法を授かったのは何故でしょうか。」と尋ねると、竜女は「私も竜の生き方には五つの苦しみがございますゆえ。」と答えた。商人「五つとは何ですか。」竜女「生まれる時、

眠る時、淫する時、怒る時、死ぬ時でございます。(また)一日に三度、皮や肉が地に落ち、熱砂が我が身に集まって焼きつけるのです。」商人「あなたは何が望みですか。」竜女「人間として生まれることでございます。畜生の身と生まれて苦しむのは、仏法を知らないからなのです。それ故、如来におすがりして出家したいと思うのです。」

竜女はすぐに八枚の金を与え、「この金はあなたの御両親や御親戚の方々が終身お使いになっても使い切れぬでしょう。」と言い、重ねて「眼を閉じて下さい。」と言った。あつという間に神通力によつて故国に帰り着いた。商人は「これは竜の金です。」と言って、八枚の金を父母に与えた。そして「私が(死んで)更に生き返つて死ぬまで使つたとしても、使い切れないでしょう。」と語った。

ちよど仁愛の心を起こして施さないではおられず、かりそめに竜女を救つたところ、報恩は一層盛大であった。(ちよつとした善行でもこれ程であるのに)ましてや大法会を挙行すれば、福を受けることがどうして小さからうか。

○17 「釋玄照」

〔本文〕

釋玄照修道於嵩山白鵲谷。操行精懇、冠於緇流。常願講「法華經」千遍、以利於人。既講於山中、雖沍寒酷熱、山林險邃、而來者恆滿講席焉。

時有三叟、眉鬚皓白、容狀瓌異、虔心諦聽。如此累日、玄照異之。忽一旦、晨謁玄照曰、「弟子龍也。各有所任、亦頗勞苦、已歷數千百年矣。得聞法力、無以爲報。或長老指使、願效微力。」玄照曰、「今愆陽經時、國內荒饑。可致甘澤、以救生靈。即貧道所願也。」三叟曰、「召雲致雨、固是細事。但雨禁絕重、不奉命擅行、誅責非細。身首爲憂也。試說一計、庶幾可矣。長老能行之乎。」玄照曰、「願聞其說。」三叟曰、「少室山孫思邈處士道高德重。必能脫弟子之禍。則雨可立致矣。」玄照曰、「貧道知孫處士之在山也。而不知其所行。又何若此邪。」三叟曰、「孫公之仁、不可診度。着『千金翼方』、惠利濟於萬代、名已籍於帝宮。誠爲貴真也。如一言救庇、當保無恙。但長老先與之約。如其許諾、即便奉依。」即以拯護之方、授於玄照。

玄照詣思邈所居、懇誠祇謁、情禮甚謹。坐定久之、乃曰、「處士以賢哲之度、濟拔爲心。今者亢陽、寸苗不植、嗷嗷百姓、焦枯若此。仁哲之用、固在於今。幸一開恩、以救危歎。」思邈曰、「僕之無堪、遁棄山野、以何功力、濟於人也。苟有可施、固無所怪。」玄照曰、「貧道昨遇三龍、令其致雨。皆云、『不奉上帝之命、擅行雨者、誅罪非輕。唯處士德尊功大、救之則免。』特布腹心、仰希裁度。」思邈曰、「但可施設、僕無所惜。」玄照曰、「既雨之後、三龍避罪、投處士後沼中以隱。當有異人捕之。處士喻而遣之、必得釋罪矣。」思邈許之。

玄照歸、見三叟於道左。玄照以思邈之旨示之。三叟約一日一夜、千里雨足。於是如期汎灑、澤甚廣被。翌日、玄照來謁思邈。

對語之際、有一人骨狀殊異。徑往後沼之畔、暗唾叱咤。斯須、水結爲氷。俄有三纒、二蒼一白、自池而出。此人以赤索繫之、將欲挈去。思邈召而謂曰、「三物之罪、死無以贖。然昨者擅命、是鄙夫之意也。幸望脫之、兼以此誠上達、恕其重責也。」此人受教、登時便解而釋之、携索而去。

有頃、三叟致謝思邈、願有所酬。孫曰、「吾山谷之中、無所用者。不須爲報。」回詣玄照、願陳力致效。玄照曰、「山中一食一納、此外無關。不須酬也。」三叟再爲請。玄照因言、「前山當路、不便往來。却之可否。」三叟曰、「固是小事耳。但勿以風雷爲責、即可爲之。」是夕、雷霆震擊。及曉開霽、寺前豁然、數里如掌。三叟復來、告謝而去。

思邈至道、不求其報、尤爲奇特矣。(出「神仙感遇傳」)

〔訓誦〕

釈玄照 道を高山白鶴谷に修む。操行精愨なること、細流に冠たり。常に『法華經』を講ずること千遍にして、以て人を利せんことを願ふ。既に山中に講ぜば、沍寒酷熱、山林險遠と雖も、来る者恒に講席に満つ。

時に三叟有り、眉鬚皓白、容狀瓌異にして、心を虔みて諦聽す。此の如くして日を累ね、玄照之を異とす。忽ち一旦、晨に玄照に謁して曰く、「弟子は竜なり。各おの任ずる所有り、亦た頗る勞苦すること、已に數千百年を歴たり。法力を聞くを得たるも、以て報いを為す無し。或いは長老指使し、願はくは微力を効さんことを」と。玄照曰く、「今愆陽時を經、國

内 荒饑す。甘沢を致して、以て生靈を救ふべし。即ち貧道の願ふ所なり」と。三叟曰く、「雲を召し雨を致すは、固よりは細事なり。但だ雨の禁は絶だ重く、命を奉らずして、擅に行はば、誅責せらるること細に非ず。身首憂ひを為すなり。試みに一計を説かん、庶幾はくは可とせられんことを。長老能く之を行ふか」と。玄照曰く、「其の説を聞かんことを願ふ」と。三叟曰く、「少室山の孫思邈処士は道高く徳重し。必ず能く弟子の禍を脱せん。則ち雨立ちどころに致すべし」と。

玄照曰く、「貧道孫処士の山に在るを知るなり。而るに其の行ふ所を知らず。又た何ぞ此の若きや」と。三叟曰く、「孫公の名已に帝宮に籍さる。誠に眞真爲るなり。如し一言もて救世せらるれば、当に恙無きを保つべし。但だ長老先づ之と約せ。如し其れ許諾せらるれば、即便ち依り奉らん」と。即ち拯護の方を以て、玄照に授く。

玄照 思邈の居る所に詣り、懇誠祇謁し、情礼甚だ謹しむ。坐定まり之を久しくして、乃ち曰く、「処士賢哲の度を以て、濟抜を心と爲す。今は亢陽にして、寸苗も植たず、嗷嗷たる百姓、焦枯すること此の若し。仁哲の用、固より今に在り。幸はくは一たび恩を開き、以て危歎を救はんことを」と。思邈曰く、「僕は之堪ふる無く、山野に遁棄するに、何の功力を以て、人を濟ふや。苟くも施すべき有らば、固より慍しむ所無し」と。玄照曰く、「貧道昨に三竜に遇ひ、其れをして雨を致さし

む。皆云ふ、『上帝の命を奉らず、擅に雨を行ふは、誅罪輕きに非ず。唯だ処士は徳尊くして、功大なれば、之を救はば則ち免る』と。特に腹心を布けば、仰ぎて裁度を希ふ」と。思邈曰く、「但だ施設すべくんば、僕惜しむ所無し」と。玄照曰く、「既に雨の後、三竜罪を避け、処士の後沼の中に投じて以て隠る。当に異人有りて之を捕らふべし。処士諭して之を遣らば、必ず罪を積さるを得ん」と。思邈之を許す。

玄照 帰り、三叟を道左に見る。玄照 思邈の旨を以て之に示す。三叟 一日一夜にして、千里 雨足らんことを約す。是に於いて期の如くして汎灑し、沢甚だ広く被る。翌日、玄照 来りて思邈に謁す。対語の際、一人の骨状殊に異なる有り。徑ちに後沼の畔に往き、暗啞叱咤す。斯須にして、水結びて氷と爲る。俄かにして三獺有り、二蒼一白、池よりして出づ。此の人 赤索を以て之を繋ぎ、將に挈去せんと欲す。思邈 召して謂ひて曰く、「三物の罪、死するも以て贖ふ無し。然れども昨に命を擅にせしは、是鄙夫の意なり。幸はくは之を脱せんことを望ひ、兼ねて此の誠を以て上達し、其の重責を恕さんことを」と。此の人 教へを受け、登時にして便ち解きて之を釈し、索を携へて去る。

有頃にして、三叟 謝を思邈に致し、酬ゆる所有らんことを願ふ。孫曰く、「吾は山谷の中に於いて、用ふる所の者無し。報いを為すを須ひず」と。回りに玄照に詣り、力を陳べて効を致さんことを願ふ。玄照曰く、「山中一食一衲、此の外 闕くる無

し。酬ゆるを須ひざるなり」と。三叟再び請を為す。玄照因りて言ふ、「前山路に当たり、往來に便ならず。之を却くるは可なるや否や」と。三叟曰く、「固に是小事なるのみ。但だ風雷を以て責を為す勿かれ、即ち之を為すべし」と。是の夕べ、雷霆震撃あり。曉に及びて開霽すれば、寺前豁然として、數里掌の如し。三叟復た來たり、謝を告げて去る。

思邈は至道にして、其の報いを求めざるは、尤も奇特為り。

〔語注〕

○釋玄照 未詳。○嵩山白鶴谷 高山は河南省登封県の北にある名山。五岳の中岳。白鶴谷は嵩山にある谷の名と思われるが、未詳。○繼流 僧侶。○返寒 氷が凍り付いて溶けない程寒いこと。○諦聽 はつきりと聞くこと。○愆陽 時候が狂い、異常に暑くなること。『春秋』昭公四年「左氏伝」に「其藏之也周、其用之也遍、則冬無愆陽、夏無伏陰、春無凄風、秋無苦雨、雷出不震、無霜霜雹、痲疾不降、民不夭札。」（其の之を蔵するや周、其の之を用ふるや遍ならば、則ち冬に愆陽無く、夏に伏陰無く、春に凄風無く、秋に苦雨無く、雷出でて震せず、霜霜雹無く、痲疾降らず、民夭札せず。）とあり、杜預注に「愆過也。謂冬温也。」（愆は、過つなり。冬に温かきを謂ふなり。）とある。○身首 体と首。『新序』「善謀」上に「身首分離、暴骨草澤。」（身首分離し、骨を草沢に暴す。）とある。ここでは体と首が離れること、すなわち斬首されることを言うか。○少室山 河南省登封県の北方にあり、五岳の一つである中岳嵩山

の西峰。太室山の西に位置する。孫思邈はこの山の藥堂峰に隠居したという。○孫思邈 ？～六八二。初唐の医者、道士。若い頃から老莊を初め諸家の説に通じていたが、仏典を最も好んだという。隋の文帝、唐の太宗、高宗が官職を授けようとしたが受けず、太白山などに隠棲したが、高宗の時には鄱陽公主邑を賜つてそこに住んだこともある。彼の著作としては『千金翼方』『千金要方』の二つの医書が有名であり、後世に大きな影響を残しているが、他に『老子』と『莊子』の注釈書も著している。現在、陝西省耀県の藥王山に彼を祀つた廟がある。『西陽雜俎』前集卷二「玉格」には、孫思邈が終南山に隠棲していた折に僧侶の宣律和尚と交流があつたこと、また竜の腦を奪おうとする胡僧が日照りを招いた際には、竜から胡僧退治の依頼を受けた孫思邈は竜宮秘伝の藥方を要求、その力によつて胡僧を退けて『千金方』三千巻を著したことが記されている。○處士 仕えないでまだ民間にある者に対する尊称。○『千金翼方』唐初の孫思邈の撰した医書。三十巻。『千金要方』を補翼するものとして編纂された。『千金要方』よりも道教的色彩が強く、各書に道方由来と思われる処方例が載せられている。「孫思邈」注に引く『西陽雜俎』の話を参照。○九陽 日照り。○嗷嗷 大勢で哀しげな声を出すさま。○危歎 「歎」は穀物が実らないこと。ここでは飢饉のこと。○腹心 真心、衷心。○裁度 程よくはかる。○暗啞 「暗噤」に同じ。怒気を含んで声高く叫ぶこと。○蒼 灰白色。白髪まじりの頭を「蒼髮」と言うよ

うに、ここでは歳をとって毛の色が薄くなったことを言うか。

○納 僧衣。○豁然 かりりと開けるさま。○『神仙感遇傳』
唐末五代の道士杜光庭（八五〇〜九三三）が著した神仙小説集。
『宋史』巻二百五「藝文志」は十巻とするが、現行の正統道藏
本は五巻しかない。明・李杰「道藏目錄詳註」巻二も五巻とす
るので、道藏が編まれた明代には既に五巻となっていたよう
である。これについて『四庫全書總目提要』巻百四十七「子」部
「道家類存目」では「此本凡七十五條。然第五卷末、尚有闕文。
不知凡幾幾條也。」（此の本 凡そ七十五條。然れども第五巻の
末に、尚ほ闕文有り。凡そ幾條を佚するかを知らざるなり。）
と、巻五の最後に闕文があることから、巻六から巻十までの後
半五巻分が失われてしまったのではないかと説明されている。
なお、この話は現行本には収められていない。

〔訳文〕

釈玄照は嵩山白鵝谷で道を修めていた。その節操や行いが慎
み深いことは、僧侶の中でも最上であった。いつも『法華経』
を千回講じ、それによって人々を救いたいと願っていた。玄照
が山中で講義を行うと、どんなに寒かったり暑かったりしても、
山が陰しく奥深くても、来る者でいつも講筵は一杯であった。

ある時、眉も髭も真つ白な老爺が三人現れた。容貌は立派で、
慎み深く耳をすましていた。こうして何日も経ち、玄照はただ
者ではないと思った。突然ある朝、老爺達は玄照に拝謁して
言った。「私ども弟子は竜でございます。それぞれに任務が有

りますが、苦勞を重ねること、はや数千百年となりました。和
尚より仏法の力を聞くことができましたが、お返しをするすべ
がございません。どうか長老にお示しいただき、微力を尽くし
たいと思うのですが。」玄照は「今 異常な天候が長く続いてお
り、国内には酷い飢饉が起こつておる。恵みの雨を降らせて万
物を救うこと、それこそが拙僧の願いである。」と言った。三
人の老爺は「雲を呼び雨を降らせるのは、もとより些細なこと。
されど雨に關する禁令は大変重く、命令を受けずに勝手に雨を
降らせれば、罰せられてただでは済みませぬ。首を斬られる恐
れもございます。試みにある計略をお話し致しますので、どう
かお聞き入れいただきたく思います。長老には従つていただけ
ますでしょうか。」と。玄照「話を聞こうではないか。」三人の
老爺「少室山の孫思邈処士は有道高德の御方。きつと私ども弟
子の禍を除くことができるでしょう。さすればすぐにも雨を降
らせましょう。」玄照「拙僧は孫処士が山に居られることは存
じておるが、いかなることを行つておられるのかは存ぜぬ。ど
うしてそのようなことがあるのか。」三人の老爺「孫公の仁は
計り知れません。『千金翼方』を著され、そのもたらす恵みは
万代にも渡るもの。あの御方の名は既に天界の宮殿の名簿にも
記されております。まことに尊き御方であります。もしあの御
方が一言でもかばつて下されば、きつと何事もなく済ませられ
ます。長老にはどうかまずあの御方と約束しておいていただ
きたい。もしお引き受けいただければ、すぐにも御依頼の通り

致しました。」そして助かる方法を玄照に教えた。

玄照は思邈の居る所に行き、懇ろに慎み深く拝謁し、心から礼節を尽くした。座席が定まつてしばらくすると、玄照は「処士は賢明なる智慧を以て人々を救うことを念願としておられます。今、日照りによつてわずかな苗も育たず、哀しげな声をあげる民草は、かくも枯れ果ててしまつております。あなたの仁愛と智慧を用いるのはまさに今。どうか一たび恩を施され、飢饉をお救いいただきたい。」と言つた。思邈は「私めは世に堪えられずに山野に逃れましたのに、如何なる力によつて人々を救うことができましようや。もし恩を施すことができるのであれば、もとより惜しんだりなどいたしません。」と言つた。玄照「拙僧は以前三頭の竜と出会い、彼らに雨を降らせるように言いました。彼らは「上帝の命を受けずに勝手に雨を降らせるのは、軽い罪ではありません。孫処士だけが尊い徳と大いなる功績を持つておられるので、あの方がお救い下されば許されましよう。」と申しております。特に我が衷心を申し上げました故、よろしくお考えいただきたい。」思邈「もしできることあるのですしたら、私めは惜しんだりなどいたしません。」玄照「雨が降つた後、三頭の竜が罪を避けて、処士のお宅の裏の沼に潜つて身を隠します。そうすると、きつと異人が彼らを捕らえに来ます。処士がその異人を論して帰らせたならば、きつと罪を許されることができましよう。」思邈は承諾した。

玄照が帰ると、道の左側に三人の老爺がいた。玄照は思邈の

言葉を彼らに伝えた。三人の老爺は一昼夜で千里に雨を行き渡らせることを約束した。そして約束した期日の通りに雨が降り注ぎ、その恩沢は広く行き渡つた。翌日、玄照がやつて来て思邈に拝謁した。向かい合つて話していると、一人の骨格が尋常でない者が現れた。まつすぐ裏の沼の畔に往き、怒気を含んだ声で叱りつけた。しばらくすると、沼の水が凍結してしまつた。突然、灰色が二匹に白が一匹、あわせて三匹の川獺が池から出てきた。この人は赤い縄で川獺達を縛り上げ、連れ去ろうとした。思邈はこの人呼んで、「この三匹の罪は、死を以てしても贖うことはできません。さりとて先に勝手なことをしたのは、私めの考えなのです。どうか彼らの縄を解き、併せて我が誠心を天帝にお伝えいただいて、彼らの重い罪をお許しいただきたい思います。」と言つた。この人は思邈の言葉を受け、すぐに縄を解いて川獺達を放し、縄を持つて帰つていった。

しばらくすると、三人の老爺は思邈に礼を言い、恩返しをしたいと申し出た。思邈は「私は山住まいなので、何も要りません。御礼など必要ありません。」と答えた。老爺達は玄照の所に行き、自分達の力を尽くしたいと願つた。玄照は「山中にて一度の食事と一着の僧衣、この外に必要なものなどござらぬ。御礼など必要ござらぬ。」と答えた。三人の老爺は更に頼み込んだ。玄照はそこで「我が寺の前方の山は道が突き当たつており、交通に不便である。この山をどかせることはできるだろうか。」と言つた。三人の老爺は「実に些細なことです。ただし

風や雷のことでお叱りになられませぬよう。すぐにもやりましょう。」と言った。その晩、雷鳴が鳴り響いた。夜が明けて明るくなつてみると、寺の前はからりと開け、数里先まで手に取るように見えた。三人の老爺が再びやって来て、御礼を言つて去つて行つた。

思邈は至上の道を体得しながらも、竜を助けた礼を求めないとは、とりわけ優れた者である。

○18 「王景融」

〔本文〕

唐前侍御史王景融、瀛州平舒人也。遷父靈柩就洛州、於堦道掘着龍窟。大如甕口。景融俯而觀之、有氣如煙直上、衝其目。

遂失明、旬日而卒。(出「朝野僉載」)

〔訓読〕

唐の前の侍御史王景融は、瀛州平舒の人なり。父の靈柩を遷して洛州に就き、堦道に於いて掘りて竜窟に着く。大なること甕の口の如し。景融俯して之を觀れば、氣の煙の如くして直ちに上る有り、其の目を衝く。遂に明を失ひ、旬日にして卒す。

〔語注〕

○侍御史 唐代、檢察及び裁判の監督、百官の非違の摘発を行う中央官庁である御史台の第三位の官で、品第は従六位下。定数は四。○王景融 未詳。両「唐書」には見えない。○瀛州平舒 今の河北省大城県。○洛州 東都洛陽を含む郡。後に河南

府と改称。『新唐書』卷三十八「地理志」「河南道」に「河南府河南郡、本洛州、開元元年爲府。」(河南府河南郡は、本洛州、開元元年 府と爲す。)とある。○堦道 墳墓の墓室に繋がる墓道。○旬日 十日間。○「朝野僉載」 六卷。初唐から盛唐の張鷟(六五八―七三〇)が編纂した小説集。『新唐書』卷五十八「芸文志二」に二十卷とあるが既に佚しており、今日見られるものは一巻本と六巻本の二系統に大別される。隋から唐の開元年間(七一三―七四一)に至るまでの朝野の見聞、逸話を記しており、特に武后朝の記事が多く収められている。なお張鷟は「遊仙窟」の作者としても知られている。この話は六巻本の卷五に収められている。

〔訳文〕

唐の元侍御史王景融は、瀛州平舒の人である。父の棺を洛州に改葬した折、堦道を掘っていて竜の穴を掘り当てた。大きさは甕の口くらいであった。景融がうつ伏せてのぞき込んでみると、煙のような気が真っ直ぐに立ち上り、目に入ってしまった。そうして目が見えなくなり、十日ほどして死んでしまった。

○19 「凌波女」

〔本文〕

玄宗在東都、晝寢於殿。夢一女子容色纓艷、梳交心髻。大帔廣裳、拜於牀下。上曰、「汝是何人。」曰、「妾是陛下凌波池中龍女、衛宮護駕。妾實有功。今陛下洞曉鈞天之音、乞賜一曲、

以光族類。」上於夢中爲鼓胡琴、拾新舊之聲爲「凌波曲」。龍女再拜而去。

及覺、盡記之。因命禁樂、自(自字原闕。據明鈔本補。)與琵琶、習而翻之。遂宴從官於凌波宮、臨池奏新曲。池中波濤湧起復定、有神女出於波心。乃昨夜之女子也。良久方沒。因遣置廟於池上、每歲祀之。(出『逸史』)

〔訓詁〕

玄宗 東都在在り、昼に殿に寝。夢に一女子の容色 穠艶ちようえんにして、交心髻を梳くあり。大帔広裳にして、牀下に拝す。上曰く、「汝は是 何れの人か」と。曰く、「妾は是 陛下の凌波池中の童女にして、宮を衛り駕を護る。妾実に功有り。今陛下鈞天の音に洞曉すれば、一曲を賜りて、以て族類を光かかしめんことを乞ふ」と。上夢中に於いて為に胡琴を鼓し、新旧の声を拾ひて「凌波曲」と為す。童女再拜して去る。

覚むるに及び、尽く之を記す。因りて禁樂に命じ、自ら琵琶を与にし、習ひて之を翻す。遂に從官を凌波宮に宴し、池に臨みて新曲を奏す。池中の波濤湧起して復た定まり、神女の波心より出づる有り。乃ち昨夜の女子なり。良久しくして方めて没す。因りて廟を池上に置かしめ、毎歲之を祀る。

〔語注〕

○玄宗 六八五〜七六二、在位七二〜七五六。姓は李、名は隆基、唐の第六代皇帝。韋氏の乱を収めて父睿宗を重祚させ、二年後の七一二年に二十八歳で即位、年号を先天とし、翌年に

は開元(七一三〜七四一)と改めた。数々の改革に着手して開元の治と呼ばれる繁栄をもたらしたが、天宝年間(七四二〜七五六)になると楊貴妃を溺愛するなどして政治を怠り、ついに安史の乱によつて都を追われる。至徳二年(七五七)には息子肅宗に迎えられて上皇として長安に帰還するが、親子不和となつて憂悶の内に七十八歳で病死。文学や音楽を好み、一梨園弟子」の故事は有名。彼と楊貴妃とのロマンスは白居易「長恨歌」など、様々な形で人口に膾炙している。○東都 西の長安に対する、副都洛陽のこと。○穠艶 あでやかなこと。○交心髻 女性の髪型の一つか。この話は宋・樂史「楊太真外伝」巻上にも載せられており、前野直彬氏は「楊太真外伝」に注して「交心髻 女性の髪の結いかたの一種。」という(「六朝・唐宋小説選」中国古典文学大系 平凡社 一九六八年)。○大帔廣裳 「帔」は袖無しの衣、「裳」はもすそ。着物の腰から下。上下ともにゆつたりした服を着ていることを言うか。○凌波池・凌波宮 ともに洛陽の宮城内に在ると思われるが、兩「唐書」に見えないため、未詳。後述する長安の竜池は側に「竜池殿」という宮殿があつたらしい。前掲の前野氏の注には「凌波池洛陽の皇城内にあつた池。」とある。○鈞天之音 天上の音楽。『列子』「周穆王」篇に「王實以爲清都、紫微、鈞天、廣樂、帝之所居。」(王 實に以爲へらく 清都、紫微、鈞天、広樂は、帝の居る所なり、と。)とある。○胡琴 形は琵琶に似て、胴と棹は竹で作つた二弦の弦楽器。馬の尾の毛を張つた弓で弾く。

俗に胡弓という。○凌波曲 曲の名。「竜池楽」に同じ。『楽府詩集』卷七「郊廟歌辭」に「唐享竜池楽章」十章が載せられており、その解題にこの『逸史』の話が引用されている。また玄宗がこの「竜池楽」を作曲したことは、『新唐書』卷二十二「礼楽志」に「初、帝賜第隆慶坊、坊南之地變爲池。中宗常泛舟以厭其祥。帝即位、作龍池樂。舞者十有二人、冠芙蓉冠、躡履。備用雅樂、唯無磬。」（初め、帝第を隆慶坊に賜り、坊南の地變じて池と爲る。中宗常に舟を泛べて以て其の祥を厭す。帝即位し、「竜池楽」を作る。舞ふ者十有二人、芙蓉冠を冠し、履を躡む。雅樂を備用し、唯だ磬無きのみ。）と記されている。但し『新唐書』に言う「竜池」は長安に在り、この話と一致しない。唐享竜池楽章については、市原里美「唐享龍池楽章訳注（上）（下）」（『中國學研究論集』第十七・十八号 二〇〇六年・二〇〇七年）を参照。○『逸史』 晚唐・盧肇（八二〇～八七九?）の編纂した小説集。もと三巻とされるが、今に伝わるのは一巻本のみ。神仙故事を多く収めており、その中には多少の民間伝説も含まれている。

〔訳文〕

玄宗は洛陽に滞在していた折、宮殿で昼寝していた。すると夢に交心髻を結った艶やかな容貌の女性が現れた。女性はゆったりした服装で、寝台の下で拝礼した。帝が「そなたは何者か。」と尋ねると、「私は陛下の凌波池に住まう竜女でございます。私に聊か功績があります。」

れば、今陛下は天界の音楽にも通曉しておられるとのこと、どうか一曲を賜り、我が一族を輝かしきものとしていただきと存じます。」と言った。帝は夢の中で胡琴を弾き、古今の音楽を拾い集めて「凌波曲」を作り上げた。すると竜女は再拝して去った。

玄宗は目が覚めても、曲を全部記憶していた。そこで禁中の楽団に命じて、自らも琵琶を手にして、何度も繰り返し練習した。そうして従官達を凌波宮に集めて一席設け、池に向かつて出来上がったばかりの曲を演奏した。すると池に波が沸き上がったかと思うと再び静まり、波の中心から神女が姿を現した。何と昨夜の女性であった。女性は暫くしてからやつと沈んでいった。そこで池の畔に廟を建立し、毎年祭祀を行った。

（続）

元原稿製作者・編集担当者

◎屋敷 信晴

項 青

○福本 陸美

山下 宣彦

本園 明宏

（○は編集担当者、◎は編集責任者）